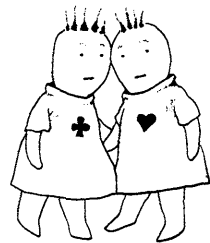


## 〈巻頭言〉

# 「教育」 過剰の教育不在

小川 博久



この表題は二十七年前、私が北海道教育大学釧路分校に勤めていて地元の高等看護学院の学園祭の講演会に招かれたときの表題である。その時の講演草稿を今見直してみてあまり事態が変わっていないのを痛感している。

いや私の頭の中が少しも進歩がないのかもしれない。とはいえ事態はむしろ悪くなっているといつてよいのではないかとさえ思っている。

私はそこで、受験熱は益々加熱し、世の親達は自分の子どもの将来を考え、早くから自分の子どもの「教育」に力を入れている。しかし、一方では、多くの若者達は「教育」されることを喜ばない。あるいはうとましく思

い、登校を拒否したり、学ぶことに意欲を喪失したりしている。この事実は自ら、が自らを望ましい方向へと形成しようとする意欲、本当の意味での教育⇨自己形成が忘れられているといったことを述べたのである。

今、このことを自ら実感しているのは若者達ではないだろうか。そして自己形成の場はいわゆる「教育」のためにつくられた場所（学校）やこの物質的豊かさを謳歌している日常的な都市空間にはもはやないと感じてしまっているのではないか。だからこそ阪神の大地震後の災害援助の場に自らを立たせたり、狂信的なオウム集団の中に解脱の場を求めたりしたのではないか。この二つ

は全く反対の方向性をもちながら、自己形成の場を日常生活や学校に求めることを止めてしまっているという点では同じではないか。自己形成の動機を失った人間に情報を注ぎ込むという形の「教育」は教育不在の象徴ではない。

われわれは「教育」の教育たるゆえんを改めて求めるためには、「教育」の場としては辺境に位置づけられている幼児教育の現場で、集団生活の中での主体的動機形成の場である遊びを人間形成の原点としてふたたび見直すべきではないだろうか。

遊びは幼児自身の興味に基づいて活動が起こされる。遊びに取り組もうとする時の幼児は自分の興味の対象を目でとらえ、手にふれて活動を始める。その対象は自分の好きな人間であったり、好きな遊具や素材であったり、自分の心ひかれる場所であったりする。自分のしたいことを選ぶ幼児の目は登園直後の姿にみられる。

発動された幼児の心のうごきの中には、何気なく、無作為に生まれたものもあるけれども、園生活のどこかで

心ひかれた他児や保育者の遊びの姿への憧れがひそんでいることも少なくない。その憧れを実現しようとする手がかりが好きな遊具であったり、好きな友達や保育者であったり、憧れる遊びが展開されたことのある場所なのである。

しかし憧れを実現したいと思う幼児の取り組みはそう簡単に実現はしない。途中で断念してしまうことも多い。もしこうした幼児の思いを読みとり、憧れが実現するよう援助してあげること、幼児達一人ひとりが乗り越え体験をし、自分の物語りをつくりあげることができる。もしこんな機会が幼児に与えられたら幼児の自己形成の場として保育の重要性ははかりしれない。

しかし、一方では、エンゼルプランといった名目で駅前保育所が広く宣伝されている。働く母親にとって便利だということだけが強調され、そこで生活する幼児のあり方が問題にされることはほとんどない。幼児のくらしやいのちの豊さを保障することが教育の原点であるはずなのだが。

(東京学芸大学)